大塚 敬節
矢数 道明 責任編集

近世漢方医学書集成

88

喜多村直寛 一

名著出版 刊

NANJING UNIVERSITY OF CHINESE MEDICINE
南京中醫藥大學
1954
南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 88
喜多村直寛(一)
第Ⅲ期 全40巻

昭和五十六年十二月二十五日 発行

編者 大塚敬節
矢数道明
発行者 中村安孝
発行所 株式会社 名著出版
東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八一五)一二七〇番代
振替口座 東京七—一〇五九四番

予約限定版

製版所 株式会社 日本写真製版社
印刷所 有限会社 伊藤印刷
製本所 辻本製本所

落丁本・乱丁本はお取替えします。

3347—0986—8324

責任編集

大塚　敬節

矢数　道明

編集委員

山田　光胤

寺師　睦宗

大塚　恭男

矢数　圭堂

松田　邦夫

凡　例

一、本書第八十八巻「喜多村直寛㈠」には、『傷寒論疏義』巻首及び巻一～巻二一までを収録した。

一、本書は全て影印版によって収録したが、影印にあたっては次のようにした。

イ、新たに柱と頁数を付した。

ロ、底本を縮少し、一頁に半丁ずつ収めた。

ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。

ニ、底本にある蔵書印及び書き込みは省略した。

ホ、印刷不明な箇所は、他の版本等により補正したところもある。

一、底本は次の通りである。

傷寒論疏義　版本（嘉永五年版）　七巻首巻一巻十一冊（矢数道明氏所蔵）

一、解説は長谷川弥人（慶応大学客員教授）が執筆した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

栲窓 喜多村直寛先生

長谷川 弥人

はじめに

徳川時代に開花した学問は、明治維新により断絶したものが多いので、幕末の学者の業績は必ずしも正しく評価されないし、またその伝記も詳らかでないものが少なくない。漢方医学界において、それはとくに甚しい。一代の巨匠、浅田宗伯をして「医学博通を以て天下の重望を負う者」と云わしめた多紀茝庭(元堅)、小島学古、喜多村栲窓(直寛)の三大名医の中で、栲窓翁についてその伝記はほとんど見るべきものがない。人に遇不遇があると、誰しも浩歎せざるを得ないであろう。

本集成の一環として先生の人となりを紹介することを依頼され、軽率にも応諾したが、墓碑銘以外にほとんど文献がないし、また筆者がとくに調査していたわけでない。適任者でないことを痛感し、甚だ当惑し後悔した。しかしながら、先生の学徳を仰慕している者のなかで誰かがやるべき必須のことと思いなおし、不文を顧みず意を決して筆をとった。

碑銘を中心に、諸書にみられる断片的事項を補綴して、稿をまとめた。文章の拙劣、調査の不備、とても先生の真面目を伝えるのには、ほど遠いと云わざるを得ない。博雅の方の批正、補筆をお願いする次第である。

行　状

先生の行状は墓碑銘が唯一のまとまったものである。はじめにこれを訓釈して、二三補足する。

昔、征夷府の盛んなる文政天保の間、医学博通を以て天下の重望を負ふ者三人有り。莅庭多紀先生と曰い、学古小島先生と曰い、栲窓喜多村先生と曰う。時人之れを評して曰く、莅庭は庁堂(1)の以て敬礼すべきが如く、学古は門牆の以て仰高すべきが如く、栲窓は正寝(2)の以て其の誠を尽すべきが如しと、其の言浅なりと雖も、亦以て其の学の一斑を窺ふべし。

(1)庁堂（ちょうどう）　政治をとり行うところ。

(2)正寝（せいしん）　儀式や政治を行う表御殿。

文政天保の間とは将軍家斉、家慶の時代で西暦でいえば一八一八年―一八四三年である。開府後二百年を経て、寛政の改革などがあり、政治の歪みが表面化し、内には大塩の乱、天保の改革があり、外には外国艦が四辺にうかがうなど多難となった時代である。

しかし庶民は太平を謳歌し、江戸文化は百花爛漫と咲き誇り、学問もまた、絢爛と栄え競った。文政十三、天保改元の年（庚寅・一八三〇）には莅庭三十六才、学古三十四才、栲窓二十七才であった。森立之は「天保学舎の挙、名師哲匠、其の人に乏しからず、而して莅庭、栲窓、冬嶺の諸先生最も其の巨臂を為す」といっている。当時、先生の名声の卓越していたことがこれにても伺い知られる。莅庭、学古については後述。冬嶺とは辻元崧庵である。

先生諱は直寛、字は士栗、通称は安斎、後に父の称安正を襲ぐ。栲窓は其の号、晩に香城と号す。幕府医官槐園先生の長子なり。妣[3]は三木氏なり。

先生は文化元年甲子（一八〇四）十二月十三日市ヶ谷御門内の賜邸に生まれた。当時、多紀桂山（四十九才）が江戸の医界を牛耳っていた。槐園は喜多村家七代である（後述）。

(3) 妣（ひ）　亡くなった母。

先生天資頴異[4]、幼にして端重[5]、成人の若し。稍長じて力を学に肆にし、安積艮斎に就いて、経義を研め、古文を学ぶ。

(4) 頴異（えいい）　ずば抜けてすぐれている。

(5)端重（たんじゅう）　ただしく、おもおもしい。

安積艮斎。佐藤一斎の学僕となり勉励し、昌平黌の教官となった。万延元年（一八六〇）没した。年七十、経朱学派。その思想は『日本朱子学派の哲学』に紹介されている。先生は幼より聡明にて読書を好まれた。艮斎は「齢尚幼にして沈靖寡言、笑好は読書、終日佔畢（素読）し、声を停めず」と記している。槐園は「読書して手抄しなければ読まざるが如し」と訓えたので、先生は家訓に従い読書すれば手抄した。十六才のとき、すでに自作の文章三十編を集めて栲窓文稿と名づけ序文を書いた。また、霜落千山橘柚香、孤鴻鳴尽引愁長、人間楽事雲飛去、鏡裡剰看雪満頭」の詩を作ったが、艮斎は詩は佳ならざるなきも少壮の云うべき語に非ずと評された。少年時にすでに詩文に相当の実力を得ていたと推定される。医学は実父槐園ならびに医学館にて学んだ。(6)

文政辛巳（一八二一）の夏、始めて医黌に入り、考試して授読に摺(7)んでられ、階を歴て職を進められる。天保辛丑（一八四一）の秋、選ばれて医学教諭と為る。是に於いて海内の医生、先生の名を仰慕し、来謁する者日に衆く、咸(8)虚往実帰し、其の名一時に噪(9)然たり。既にして内斑(10)に入り、侍医に任ぜられ、法印に叙せらる。教諭は故の如し。事務倥(11)偬なるも講究して倦まず、継開(12)を以て自ら任ず。

(6)医黌（いこう）　医学校即ち医学館、躋寿館と云う。

(7)授読（じゅどく）　素読を教える役。

(8)虚往実帰（きょおうじっき）　未だ学ばずして往き、徳を得て帰る。荘子に「虚にして往き実にして帰る」の語がある。

(9)噪然（そうぜん）　噪は譟に同じ。

(10)内斑（ないはん）　幕府の医制では、表御医師（法印、法眼）、奥医師、奥詰医師、表御番医師、御目見医師、寄合医師とあった。内斑とは奥詰医師以上である。

(11)倥偬（こうそう）　いそがしい。

(12)継開（けいかい）　朱子の中庸章句の序に、往聖に継ぎ来学を開くとある。

文政辛巳（一八二一）は先生十八才である。天保二年辛卯（一八三一）先生二十八才にて家を嗣いだ。天保十二年辛丑（一八四一）先生三十八才のとき医学館教諭となった。

曰く、「医と儒と其の道相通ず、医の素難に於ける、猶ほ儒の六経[13]あるが如し。医の仲景に於ける則ち儒の四子[14]有るなり。六経は訓詁[15]を明かにせざれば其の解を得るに由なし。四子は義理を究めざれば則ち其の旨を求むる能はず。然れども義理と訓詁とは各主とする所有り、分鑣[16]異途に非るなり、」と。故に先生の素霊難経における、耑に訓詁を治め、而して仲景の書を注す。特に義理を主とし、上素難より下仲景及び晋唐の書に至る、諸学を抽繹[17]し、轃轕[18]を一掃し、融会参酌し、之れを至当に帰す。約なるも疎に失せず。詳なるも繁に流れず、其の経の整頓する者凡そ三十余部、就中、素問講義、傷寒金匱疏義は世の宝重と為る。

(13)六経　易経、書経、詩経、春秋、礼記、楽経のこと。
(14)四子　四書のこと、大学、中庸、論語、孟子。
(15)訓詁（くんこ）　字句の意味解釈。
(16)分鑣（ぶんひょう）　鑣とは、くつわ、行き先を異にする。
(17)抽繹（ちゅうえき）　ならべたづねる。
(18)轇轕（こうかつ）　雑乱の貌、轇轕に同じ。

この節は先生が古書を注解するときの立場ないし見解を述べ、実際の注解書について、論評したものである。先生自ら「宋儒の語孟（論語孟子）に注するに擬す」といい、その意気込みの盛んなことが伺われる。莅庭は『傷寒論疏義』の序に、「編首毎に各病の綱領及び伝変の理を論じ、毎章に先づ音訓を挙げ、次いで全章の義を解し、次に諸家の言の以て備攷すべきものを載す。其の意は人をして各條の要趣の在る所を蚤く知らしむるに在り」と述べている。

又世、国家の渥恩(19)に沐し、身特達(20)の知を受け、涓埃(21)の以て之を報ずる無きを思ふ。因って武英殿聚珍版式に倣ひ、『医方類聚』二百六十六巻及び『太平御覧』千巻を活字刷布し、之れを官に献納し、且つこれを諸学(22)痒に置き、以てその伝を広くす。蓋し類聚は医家叢書の冠にして、宋元亡逸の書若干を収め、博通の資は以てこれに尚ふる無き者なり。而して御覧は則ち考据(23)の淵藪(24)にして、医家に在っても亦不可缺の典なり。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

(19)渥恩（あくおん）　厚恩に同じ。
(20)特達（とくたつ）　特別に衆よりぬきん出る。
(21)涓埃（けんあい）　水滴とごみ、少量のこと。
(22)学痒（がんしょう）　学校。
(23)考据（こうきょ）　研究してより所とする。
(24)淵藪（えんそう）　魚や鳥の集まるところ、物の多く集まるところ。

この節は先生が報恩のため、『医方類聚』と『太平御覧』を出版したことを記したが、そのほか、医学館の『医心方』出版に校勘の役を担当した。また『千金方』の「大医習業」や『服薬要抄』を出版配布したり、槐園著の『蛸志』の印行、傷寒論・金匱要略に関する著書を印行した。栗本鋤雲は「家兄は医方類聚、太平御覧を刻するも、得る所、費う所を償せず」と述べてあるのをみれば、この刊行はかなりの負担であったと推測される。先生の世のため、人のためにせんとする偉大な意図がうかがい知られる。

先生人と為り、寛宏楽易[25]に人を待つに、恕を以てし、而も倫倫[26]自立し有用の学を期す。同僚と議協はざる有り、遂に退職し、城西大塚荘に老ゆ。此の時茴庭、学古の二先生逝いて既に久し。先生独り康健にて、西京洛に遊び東筑波に登り、恒に俳人歌人と風月を弄し、桑門[27]緇流と心性を談論し、怡然として自ら楽しむ。蓋し先生の崇徳鉅望、中道にして隠逸し、其の抱負する所を展ずる能はざるは、洵に天下の為に之れを惜む。

(25)楽易（らくい）　心楽しく安らか。
(26)侃侃（かんかん）　侃に同じ、剛直である。
(27)桑門（そうもん）緇流（しりゅう）　ともに僧侶。

安政五年（一八五八）に将軍家定が病気となった（七月五日没）。同年七月三日に伊東玄朴、戸塚寿庵、遠田澄庵、青木春岱の蘭医が奥医師に任用された。また湯川安道は七月に辞職している。同僚と議協わざる有りとは、将軍の診療に関してか、あるいは蘭医の採用に関してであるか、明らかでない。喜多村家の記録によると、病により安政四年八月二十五日医学館世話役を辞職し、安政五年五月三日奥医師を辞したといい、また『金匱要略疏義』に浅田栗園や黒田維孝の序文には病謝とあって、碑文と一致しないが、当時幕府を憚ったための記録であろうか。しかし前年（安政四年）に、多紀茝庭（六十三才）、辻元崧庵（八十一才）、多紀元昕（五十三才）、小島春沂（二十九才）、が病没したのみならず、前途を嘱望されていた嗣子直敬（二十九才）が夭死したことも、先生の心を退隠に導いたのでなかろうか。

しかし退隠後も、『医方類聚』の刊行を続行し、『金匱要略疏義』を刊行した。黒田維孝は「先生の意は天下後世の医を医するに在るだろう」と推測している。すなわち、単なる隠逸のみとはいい得ないだろう。しかし文久二年、京都雙林寺の芭蕉堂に寄宿し、吉野の花を賞したとの記録もあり、碑文に合致する。先生は文久二年（五十九才）『医余』に序して、「予は則ち

老憊日に加わり、復読書作文する能わず」といい、慶応元年（六十二才）の『老医臣言』には「病に臥し、児を失い妻を失う」と歎じられた。また小石川と大塚とで二回にわたり、火災に遭ったという。とくに戊辰の役に際会し、心情忍ぶべからざるものがあったようである。

明治二年（己巳）の冬と三年春に、門人の手塚氏の鹿鳴堂に身を寄せ、『医学啓蒙』を著した。明治四年、（六十四才）『医学典刊』の序に「学殖荒廃一事成る無く、徒らに皤然たる白頭翁のみ」と述べているが、勿論謙辞であり、翌五年再び鹿鳴堂に行き、『医方啓蒙』の続編の著があった。

厥の後数年、明治丙子（九年）の秋、朝庭先生の刊する所の『医方類聚』を以て之れを朝鮮に贈る。蓋し彼の土、亡逸し其の伝を失ひ、今再覩を得たり、恵異邦に及ぶと謂ふ可し。医官洪顯章等大いに喜び以て国宝と為す。朝庭為に金若干を賜ふと云ふ。先生甲戌（七年）十二月を以て風疾（脳卒中）に罹り、右身枯る。猶能く左手を以て書を作り文詩を賦す。然れども時々疾発し、神昏不語数日なり。丙子（九年）十一月九日遂に起たず、家に卒す。享年七十三、遺命にて今戸の称福寺に葬す。

先生和田氏を配し、直敬を生む。先に卒す。湯川某の子直正を養い家を嗣ぐ。而して和田氏没し、側室の女芳野未だ字せず家に在り。

直敬は安貞と称し、安政四年二十九才にして没す（後述）。

湯川某とは湯川安道の子である。哲三という（後述）。

和田氏とは幕府医官和田春長の女である。文久二年壬戌（一八六二）に没したと推定される。

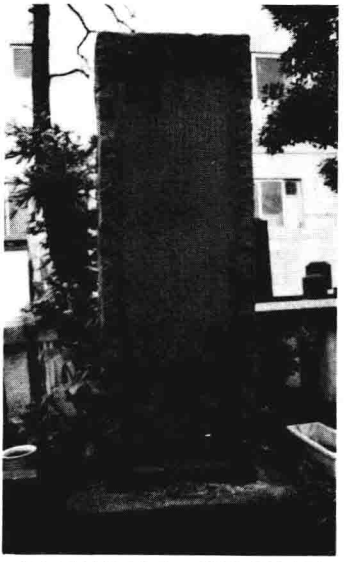
栗本鋤雲は先生のことに関し、「仁の功あって（『医方類聚』などの刊行をさす）仁の報を得ず」と記しているが、先生の晩年は妻子を失い、かつ政局は桑滄の変あって心情身辺誠に寂寞として同情を禁じ得ない。しかし弟鋤雲は報知新聞の記者として名声を馳せ、しかも栗園との親交衰えず、かつ愛弟子平石、手塚の在るあって、僅かに慰められた。また『傷寒論疏義』、『金匱要略疏義』は、後学をして永く先生を欽慕させるであろう。

是より先数月、書を惟常（浅田宗伯）に寄せて曰く「枯木再栄無く死灰復燃えず、余将に遠からず泉下に帰せんとす」と。乃ち「東游学士倘し相訪はば、紅杏花深し一方の碑」の句あり。実に讖となる哀しい哉。惟常諸生と為り、初めて江戸に来り人の知る者無し。惟先生一見して斯道を以て相許し、辱交三十余年先生の蔭を以て侍医の後に列す。先生を知る尤も深し、況んや臨没の嘱あり、豈不文を以て辞す可けんや。

この節は碑文を作った事情を述べたものである。「讖となる」は予言となるの意で、もと纖に作る。讖の誤なり。

乃ち銘に曰く

惟れ学と術と、聖に継き賢を開く、時に遇はず、古において独り全し、彼の兢々たる者、咸忽[20]



喜多村栲窓先生の墓碑(称福寺)

称福寺(台東区今戸)

嘉永2年、法眼に叙せられたときの叙任状(喜多村洋三氏所蔵)

に属す。

先生の述作、海外永く伝ふ、墨水の匡(ほう)、鬱々たり新阡[29]、

墓木惟れ何ぞ、冬青万年

明治十年丁丑　春　浅田惟常謹んで撰す。

(28)兢々（きょうきょう）　かたくつよい。

(29)阡（せん）　墓の道。

碑は浅草今戸の称福寺の墓地に今なお現存する。すなわち門に入ると亀田鵬斎の墓があり、先生の碑は門の右手に存在する。明治十五年建之とあり、栗本鋤雲、喜多村直正、平石謙三の名がある。建ててより百年も経ているので、碑文の文字は磨滅しかかっていた。

学問と著書

先生の学問を知るには、時代的背影にも目を注ぐべきであろう。先生の誕生の約百年前には山脇東洋（一七〇五―一七六二）、吉益東洞（一七〇二―一七七三）が生まれ、いわゆる古方を唱導し、日本の医界に親試実験、今でいう科学思想を鼓吹した。

次の世代には古方を遵守する、村井琴山（一七三三―一八一五）、中西深斎（一七二四―一八〇三）、岑少翁（一七三二―一八一八）、治術を第一とし、折衷派と称された和田東郭（一七四四―一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com